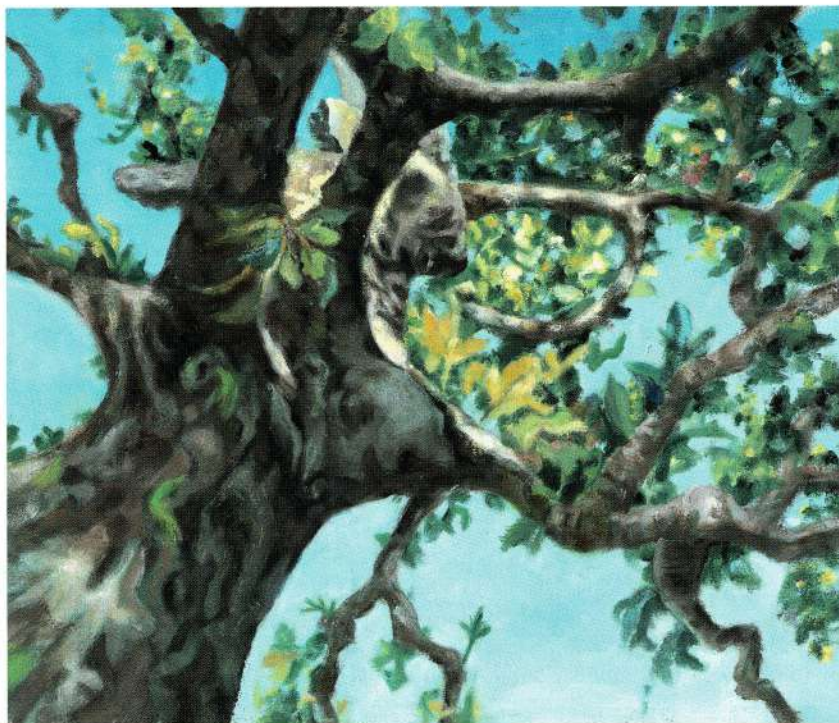


村野次郎創刊

# 香蘭



2023年(令和5年)12月号

香蘭賞発表、満木好美歌集『黄金家族』批評小特集

第100卷

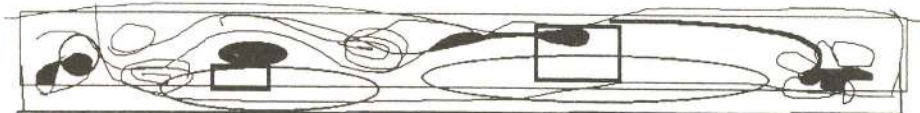
第12号

通卷1116号

二〇二三年(令和五年)十二月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇〇卷第十二号



# 香 蘭

2023年(令和5年)12月号  
香蘭賞発表、満木好美歌集『黄金家族』批評小特集  
第100巻 第12号 通巻1116号

## 目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(100) ..... 杉山伊都子 : 表二  
近詠十五首 デラシネの子 ..... 小笹岐美子 : 2  
作 品 ..... 4

一 ..... 31  
二 ..... 46  
三 ..... 61  
推薦香蘭集 ..... 64  
香 蘭 集 ..... 84

作品一 十首選(十月号) 千々和久幸選 ..... 15

作品二・三 十首選(十月号) 桜井京子選 ..... 16

一頁公論(31) 鎌倉歌話会のこと ..... 18

村野次郎への旅(164) ..... 20

令和五年度 香蘭賞発表 ..... 23

「香蘭」とともに(2) 遠い記憶 ..... 37

明宝研究会第一四四回 九月例会 満木好美歌集『黄金家族』を読む会 ..... 39

エッセイ・自由研究 源氏物語の六条御息所と能 ..... 58

魚 点(十月号) 日常を詠む歌のむこう ..... 62

七 首 抄(十月号) ..... 64

小原裕光「谷戸の春秋」評(十月号近詠十五首) ..... 65

作 品 評(十月号) ..... 66

作品一 ..... 66

作品二 ..... 66

作品三 ..... 66

香蘭集 ..... 66

緑 地 帯 ..... 74

耳言あれこれ(25) ..... 77

他誌拝見130 ..... 78

歌会及び会合・会員消息・他 ..... 80

編集後記・新宿日記 ..... 84

表紙絵 ..... 中村 陽子「春ひかる」 目次・緑地帯カット ..... 和田 和雄

杉山 伊都子

もの言へば白き齒が見ゆる生えそめて

はつはつ見ゆる白き吾子の齒

『樗風集』

この作品は、『樗風集』では数少ないお子様を詠んだものである。昭和三年作とあるので、先生三十四歳の時のお子様である。

この歌の五首前に「をさなごはかけいでて外にゆきたれどはや大きければ間違ひならむ」がある。もしかして、現「香蘭」発行人の中村富美子様の事かなと思ったりする。その弟？妹？ 何にしても、子の齒の生え初めたことを喜ばれている心温まる歌である。

はつはつは、わずかに、の意だから、そろそろかな、といつも気に留めておられたのであろう。あやして片言を聴いて楽しまれていたある日、見つけたのでしょうか。お忙しい先生が家族を大事にしておられたことが分かり嬉しい。村野先生の歌風は「平明にして流麗」のびやかなリズム。清潔感。読者に読むことの負担をまったく感じさせない）などと千々和代表が解説に書かれている。『樗風集』を改めて読み勉強させて頂いて、ありがたかった。

（短歌新聞社文庫『樗風集』107頁に掲載。『村野次郎三百首』には収録されていない）

## 四 選 者 の 作 品

さよならば 平塚 千々和 久 幸

スペインのワイン飲み過ぎ約束をすっぱかしたりスペイン遠し  
かの人はいずこにいか暮らしいん鬼平見ながらふとも思えり  
諭えなば昭和演歌のごとき恋終えんとしつ時ながく経つ  
見えるものは見るな見えないものを見よ 見なくともいいものは見ざりき  
傍らに死が来ていると言いたれば両肩揺すりきみ慟哭す

飲までもの酒飲み言わでものことを言い嫌われている歌会のと  
さよならばきみの魂に届けるや鈍色の海静かなり今日

夏だけが 東京 桜井京子

いくたびか終はつてまた咲く海紅豆すこしさびしい不実のやうで  
藤づるが日陰をつくるベンチなり誰も座らず夏だけがある  
いつの日か至福の日々と思ふのか思ふのだらうあふむけの蟬  
もう空をやめたくなつたと空言へり炎熱の街を驟雨がとほる  
卓上にひと置かれてゐるメガネ見えないものを見てゐしならむ  
ほんたうは誰にも教へたくないのだがマイキユロンEXは水虫に効く

長じては短歌など始めしが文芸部われの見てゐたる夢  
夜が明けて点つたままの街灯のやうに怠惰なひと日がありぬ  
大 刀 自 横 浜 渡 辺 礼比子

坂上郎女の歌を読むほどに古代の人の謎は深まる  
男から歌を贈られすみやかに返せし歌の当意即妙

恋いくつ経てつづまりは異母兄の妻となりたる坂上郎女  
異母兄に嫁ぎて得たる長の娘を甥の家持に嫁がせにけり  
ふたり子の縁談纏め女婿らに相聞贈りし心やいかに  
むすめ婿ふたりに贈りし相聞歌代作も或は本気もあらん

一族の結束のため近親の婚すすめしか古代の大刀自  
盆果てて皆ちりじりになりゆけり夕べを透るカナカナの声

葉月・鎌倉 鎌倉 高 島 憲 子

み社の雪洞変はらず灯さるる変はらぬがよしの葉月かまくら  
しばらくを会はざる友の雪洞に「海」の一文字灯されてをり  
にはか雨に雪洞は取納されしまま今年の実朝祭の始まる  
講演の春日いづみ氏やはらかな声に言葉のいづみを語る  
三年ぶりに手水舎に戻る柄杓にてこんこんと湧く清水を汲めり  
外つ国の旅人の声も交じりをり斎庭をわたる葉月の風に  
孫一人帰らし跡を片付ける われの祖母には孫十二人  
わが浴衣の肩揚げ縫ひたる祖母のごとわれも縫ふなり孫の肩揚げ

# 作品一 十首選



(十月号作品から)

千々和 久 幸 選

・この頃は独り言<sup>ひとりごち</sup>つこと多くなり気付けばテレビ相手にももの言ふ

青山 侑市

ああこの感じ分かるよなあ、という歌。話し相手が欲しい訳でも、格別言いたいことがある訳でもない。だが周辺のこととが妙に気になつて何かひと言わずにはおれない、という老來心理。

そして気が付けばテレビにぶつさ言っている自分に気付く。ついでに身近にあるものをテレビに投げつけたりしないことだ。雑巾やティッシュペーパーなら大丈夫だが。

・女とは狡くて淫らで嘘つきで…鬼平言へり陰口ぞよき

桜井 京子

裸の人間の表裏をいやと言うほど見てきた強者鬼平の女性観を、男ども(いや女どもも)はどう聴いたものか。鬼平なら存外、だからいつそ女は可愛い、とあつさり認めるかも知れない。作者はニュートラルな位置にいて、自分の投じた一石を男どもより実は女どもがどう聴くか見守っているのだ。

あまつさえ「陰口ぞよき」と挑発しているのだから、女どもにもひと言言わざるべからず、である。ただしこれをしもセクハラと言

うようでは、はじめから鬼平を語る資格はあるまい。

・生きるのは仕方ないとてねぢ花は思ふがままにねぢられてゆけり

石井 雅子

一、二句の繋がりが見えて要領を得ない。あえて言うなら「生きるのは仕方ない(死にたいのだから)」と読めてしまう。だが翻訳すれば「生きる以上は仕方がない」「生きねばならぬのは仕方がないこともある」と言いたいのだろうか。

つい言葉が先走って踏み外したが、それは作者の本意ではない。「仕方なく生きていますとねぢ花は」とでもすればまだしも救いはあろうが、「ねぢれ」に拘ると本当に捻れるからご注意を。

・氷河期以来史上最高の猛暑とか団扇であおぎ風鈴鳴らす

伊藤 康子

皮肉と反骨精神の歌。昨今の「危険な暑さ」も耳にした当初はもの珍しいフレーズだったが、はや色褪せた。「氷河期以来史上最高」は作者の創見かどうかは知らないが、意表を突いたウイットが嬉しい。耳にすれば流布しそうなフレーズである。

その猛暑を「団扇と風鈴」で迎え撃つというのだからこの作者の皮肉と反骨精神はハンパではない。今どき団扇はお祭りくらいしか出番はあるまし、風鈴は団地やマンションのどこに吊るせばいいのか。それでもオールドファッションに拘つた心意気が嬉しい。

・ドーナツを持ちてたずね来し友の言う「夫のお墓が決まりました」

長野 道子

何でも無い世間話のようだが、読む人によっては胸に刺さる。わたしのように長男でありながら(出郷者ゆえに)先祖代々の墓から弾き出された者は、今もってデラシネ暮らし。

この歌、ドーナツと暮はどんな関係があるのか、など賢しらに聞  
いてはいけない。さすれば「人間」ところ青山あり」は、しよせ  
ンデラシネの負け惜しみであることが分かる。

・連日の三十八度暑いほどわれに残れる野性目覚むる

鈴木 桂子

やや理に傾斜した一首だが着眼がユニーク。平常時は（理性の）コ  
ントロールによって、野性は眠っているが、周辺の異常な環境変化  
に肉体が条件反射してその理性が緩み、野生を呼び覚ましたと言  
うのだ。作者の体験的事実だろう。

ところで野性って何と問われる向きには、新明解国語辞典の解釈  
を紹介しておく。曰く「人間の持つ動物としての本能に基づいたか  
と思われる、したたかに生き抜こうとするたくましさや、そのため  
の闘争心」という。ここから先は矯めつ眇めつ辞典と睨めつとして、  
自分の気持の落ち着く先を見極めて欲しい。

・梅酒飲み「はやねはやおき」と唄へつつ寝に就く人と暮らす運命

土井紘二郎

生真面目で堅実な人生観の持ち主である妻を持ったオトコの、倦  
怠感混じりの溜息が聞こえる。結句は「暮らす運命」とあるが、  
「か」は詠嘆を含んだ軽い疑問で、「この運命からは逃れようがない」  
ことは作者も先刻承知ずみ。

その昔、「人生二度結婚」説を唱えた学者がいたが、今日では忘れ  
られている。それはさて置き、夫婦はお互い様だ。妻は思う存分夫  
を尻に敷き、夫は夫で大声で愚妻を罵倒しよう。運命また楽しから  
ずや、である。

・オッパイを欲しいと泣く児に娘が諭す我慢のできる男になれと

満木 好美

なぜか可笑しい。ジエンダーが煩い今日現在、我慢するのは男と  
いうイメージが未だ生きていることが可笑しい。もしも泣く児が女  
の児だったらどう諭したのだろうと、余計な心配がしたくなる。

孫歌などと言うなかれ。そんなことよりこの作者の「黄金家族」  
が現在も健在であることが嬉しい。

・七月の中旬なるに三十九度夏はクーラーが妻よりも好き

森田 徹

素知らぬ顔をしてこんな歌を出してくる。このカマトト振りが作  
者の真骨頂。どだいクーラーと妻を同列に置くとところからして男尊  
女卑。だがこれは「妻よおまえが好きだ」と九州弁で（！）言っ  
ているのだ。ならば「冬はヒーターより妻が好き」かね。妻を喜ばせ  
るにはボキヤ貧ではつとまらぬ。悲しき者よ、汝の名は……。

同じ一連に「わが過去の懺悔の欠片が突き刺さる痛くはないが涙  
出で来る」があるが、この作者の真情を見た思いで切ない。

・「愛してる」の無料スタンプもらい送り送る相手がいらない私に

八木橋洋子

一読、どこぞの選者のように「知らんがな」と横を向いてしま  
う訳にもいくまい。またああそうですかというには痛々し過ぎる。もつ  
とも自らを揶揄する歌だから相手が居ようが居まいが、痛くも痒く  
もないのだ。「人間万事塞翁が馬」は大人の知恵だが、迂闊なことを  
言えば「能登猿山に白亜の灯台あると言う蟒蛇三枝子先生の故郷」  
と逆襲されかねないので、贅言は慎もう。

# 作品二、三 十首選



(十月号作品から)

桜井京子 選

・正義とうラベル貼られて届くのかクラスター爆弾ウクライナへと

小笹岐美子

クラスター爆弾は、多数の小型爆弾を飛び散らせる殺傷力の高い爆弾のこと。アメリカはこれをウクライナに供与することを決めたが、この非人道的な爆弾に対して、作者は異議申し立てをしているのだ。「正義とうラベル」は月並な比喩だが、元来、殺戮のためのいかなる兵器にも正義などあるはずがない。眼目は二、三句のアイロニーにある。やや理に即き過ぎているため、詩としての膨らみに欠けるが、ウクライナ戦争の泥沼化していく一面を、声高にならず切り取った一首である。短歌という短い詩形では多くは言えないが、ささやかでも声を上げることが重要なのだ。

・灼熱の残る夕べに水割りの氷の音をこつんと鳴らす

庄司 健造

猛暑の中、一日の務めを終えてほつと一息、今夜の晩酌は水割りにした作者である。コップの中の水が小さな音を立てて、一日の労をねぎらっている。平凡な夕べのひとつときに安らぎを見出し、豊かな気分になれる歌。内容的に問題はないが、初句の入り方が滑らかではない。「暑さなお残る…」くらいでよいのではないか。

・色あせた紫陽花ぼんやり佇んで仕方がないと言うにもあらず

竹本 幸子

「母逝く」とタイトルのある一連の掉尾の歌。盛りを過ぎた紫陽花を擬人化し、作者の心象を反映した一首である。美しく咲き誇っていた紫陽花が、色を変えながら次第に褪せていくのは痛ましい。命あるものはみな時間とともに移ろい、なすすべがないという無常観でもあろうか。だが、この歌は結句に来て少しひねりを加えたところに工夫がある。ここに僅かな屈折が見える。あるいは「仕方がないと言うにあらずや」でもよかったか。

・スターバックスの大小の紙コップTサイズを頼んでみたが

川久保百子

コーヒーを注文するとサイズを問われるが、ほとんどの人はショートサイズを頼んでいるように見える。この日の作者は何を思ったか、少し大きめのTサイズにしたという。だからどうなのかと問われたら、この些細な出来心こそが詩の契機になったということだろう。何の変哲もない代わり映えない日常にあって、僅かな変化を求め何の気持ちも作者の中にあつたのかも知れない。何気ない日常のこんなところにも詩は転がっている。

・松葉杖ついて医者より帰りゆくわれを夕日のさす坂が待つ

河野 慎二

この一首前に利き足の小指を骨折したという歌があり、その通院の帰りだろう。ケガをするのは一瞬のことだが、治るまでには忍耐が必要だ。松葉杖で坂道を行くのはつらくても、目を上げて夕日の方を見るとよい。ゆつくりと沈んでいく夕日は、作者を見守り励ま

しているのではなかったか。ロマンティックには少し遠いが、自らと対話するような詠み口で、生きる上での大切な何かをさぐりあてようとしている歌。一日も早い快癒を願っている。

・朝になりまだ生きており目を覚ます電車の音が世とのつながり

小城 勝相

いつか眠ったまま目覚めることのない朝が来る、そんな想像をしてしまう作者。あまり体調がよくないのだろう。それでも生きていく限り、朝が来て目覚めるといふ、その繰り返しである。散文的でありに即き過ぎたくらいはあるが、朝の目覚めに聞いた電車の音は、

この世の音であり、何か尊いもののようにも思えてくる。現役時代は多くの教え子に囲まれ、研究者として活躍した作者である。体調が元に戻り、また電車に乗って出掛ける日が来るよう願っている。

・テレビからあしたがあると聞こえる空から雪など降ってこい夏

篠永 路子

連日、猛暑が続いたこの夏、やぶれかぶれのように言い捨てた下句に爽快感がある。照りつけるかと思うと突然スコールのような雨になり、ところによっては雹も降り（雪は降らないが）、異常気象であることは明らかだ。この作者は鬱憤の吐きどころがないのだ。平々凡々たる日常からの脱出願望ともこれよう。世界のあらゆるものが狂い始めている時代にあつて、どんな明日がやって来るのか、そのうちに雪だつて夏に降つて来るかも知れない。

・負けるなよ生物兵器にもコロナにも海に瞑目の先祖の声す

能城 春美

「コロナ判明」とタイトルのある一連の一首。新型コロナウィルス

に感染した作者は、ウィルスと闘いながら、遠い先祖の声を聞いたのである。地球上の生命の起源は、およそ40億年前の海底に始まったと言われている。地球上のすべての生命がその遠い先祖に行きつくつれば、人間もウィルスも生物兵器もそこから派生した結果といえよう。地球上で仲良く共存できる関係ではないが、先祖の声はウィルスに苦しむ作者を励ましている。スケールの大きな歌であり、生命の不思議さに手を翳した魅力のある歌である。

・まなかいをふんわりふわり舞う蛍 義母と暮らした四十五年

馬場 美信

最近では蛍を見かけることは少なくなったが、闇の中を飛び交う幻想的な光景は忘れ難い。ここで歌われた義母はすでに亡くなったと読んだが、蛍のゆるやかな飛翔が義母の面影と重なって、はからいのないシンプルな描写が美しい。今、目の前を懐かしむかのように飛ぶ蛍は義母の魂か。共に暮らした四十五年という歳月はかりそめではない。さまざまに愛憎を重ねたであろう日々を思うとき、まつわりつくように飛ぶ蛍が愛おしい。

・夏の日の噴水にはしゃぐ子どもたち水の粒子は風に流れて

藤田 祐恵

子どもたちは歓声をあげて噴水に遊び、近くでは親たちが見守っているのだろう。よく見かけるいかにも夏らしい光景である。だが、作者は子どもたちから少し視点を変えて、消えてゆく水の粒子の行方に目を凝らしている。詩的なものを捉える確かな眼差しが感じられる。子どもたちの未来はこの先、どんな世界に変わっていくのか。この平和な光景が長く続いてほしいと願わずにはいられない。



# デラシネの子

## 小笹岐美子

父母共に外地生まれと言いたればうちの子もそうと商社マンの妻は

父二十歳母十五で故郷は外国となる 日本敗れて

幼き日暮らした家も学校も見たという父台湾高雄で

よく来たと亡き父が立っているような高雄の町のどこか懐かし

龍眼はぬるりと濁った大きな眼ライチと呼ばば別物となる

チマ・チヨゴリ着たいと言ったら叱られた幼き日のこと母は語り

朝鮮から引き揚げてきた祖母の作る本場仕込みのキムチ好評

引き揚げ者と呼ばれて差別されたわと十五の頃を母は語りき

見たければ連れてゆくよとわが言えど韓国旅行を母は望まず

官と軍は先に引き揚げ残されし民の悲惨は長く続けり

あの女優、あの作家もそうだって 母の中なる朝鮮蔑視

## ひと言随想

聞き覚えある朝鮮語を懐かしみ母は韓流ドラマにはまる

八人の首相輩出したること誇れるだろうか我が山口県

この町に残れと親は言わざりき三人兄弟誰も残らず

宝塚、刈谷、鎌倉とそれぞれにデラシネの子は縁なき地に住む

以前香蘭の大会に「父母共に外地生まれの故なるかデラシネの気配我が内にあり」という歌を出した。その歌評を聞いて驚いたのは、「外地」という言葉に対する認識のギャップだった。

私の父は大正十四年台湾高雄で、母は昭和四年朝鮮京城（ソウル）で生まれた。父は二十歳で招集され本土へ、母は終戦直後に引き揚げてきた。外地＝日本が支配していた植民

地というのが私の認識だった。しかし外地勤務の経験者にとつて、外地は単に外国を示す。両親は結婚後、山口県徳山市（現周南市）で暮らし、私も十八歳までそこで育ったが、両親のこの地への執着はあまり強くなかったし、私も故郷という気持がどこか薄い。デラシネの子は、そうなるのか。まだ十分言葉に出来ていないが、今回の十五首をその入り口としたい。

村野次郎への旅（164）

## 大正期の「香蘭」（二十五）

千々和 久幸

前号に引き続き「香蘭」第四卷第十二號を  
読んで行こう。この號は大正十五（1926）  
年十二月一日に発行された。表紙畫及題字、  
裏畫の北原白秋に変わりはない。総頁數53頁  
で、卷末に村野四郎詩集『巽』（曙光詩社發  
行、定價壹圓）の廣告が掲載されている。

目次を簡単に見て行けば、次の通りである。  
最初の短歌欄には村野次郎、島田旭彦、橋本  
敏夫、清原齊、本間樂寛、南部松若丸、龜井  
相月、南草萌、東朱雀、川村浩、冬野清張、  
石野正太郎、杉浦翠子の十三名。

次いで南部松若丸のエッセイ「柿蔭集より  
觀たる島木氏の心境（二）」、次の短歌欄には  
芥子澤新之助、成田憲三、山野麥樹、眞島勝  
郎、松丸甞一郎、日根まもる、住吉良康、西  
村孝、若林登の九名。

本間樂寛のエッセイ「俳人一茶の面影（承  
前）、極月集（短歌）」に山室岩雄ほか十一名。

香蘭合評会、前月歌壇合評（杉浦翠子、今井  
嘉雄、清原齊、村野次郎）、朝霜集（短歌）に  
鹽塚芳太郎、森山茂ほか十二名。橋本政一の  
エッセイ「年末に際して」、寒月集（短歌）に  
竹井邦廣ほか二十八名。そして最後に六號雜  
記、編輯後記と続く。

例によつて巻頭に掲載されている先生の歌  
を読もう。

高雄山

村野 次郎

①羊齒ヒメダマの葉の岩間に漏れて光れるは朝霧晴れ  
て間もあらぬなり

②霧晴れて久しと思ふに下蔭はまだ露深しり  
んだうの花

③あやうかる思ひに人もすぎつらむきりぎし  
高くかゝる大岩

④阪道ヒコノミチにとゞまり見れば秋山の梢の空に雲流  
れたる

⑤秋山の落葉をくゞるせせらぎのこの明るさ  
に音きこゆなり

⑥木々の間にたぎちて見えしたがは谿川も暮るれば  
遠し夕もやの中に

タイトルになった「高雄山」は、京都市右  
京区梅ヶ畑のそれではなく、武蔵野沿線の高  
尾山である。本号の歌會記事から抜き書きす  
れば、この一連は次のごとき背景のもとに詠  
まれたものである。

十一月十四日、此日、朝から晩秋初冬の光  
爽やかにさして、吟行には絶好の日和になつ  
た。早くから詩社の方へ詰めかけた私達は幸  
であつたが、新宿驛で待合はせた方の中には、  
角筈の大人等の出發が豫定より少し遅れた爲  
しびれを切らしてお歸りか、先行せられた方  
があつたかもしれないのはまことに遺憾  
で、其爲か同行は七人を数えたのみ。

而し武蔵野沿線の風光は皆を酔はずには充  
分で、多摩川邊の空と連なる渺々たる廣野を  
眺めた時は、期せずして嘆賞の聲が放たれた。  
淺川へ着くと、折から日曜の人の出のさかり、  
山路は參々伍々、歡談笑聲裡に頂上の十二州

見晴し臺に着いたのは午後何時であつたらうか。…この後、同地の商業會議所内に歌會が開かれた。親しみ溢れた會合であつた。午後九時卅五分、八王子發、車中も又香蘭合評にひとしきり賑はつて、新宿着散會したのは一時であつた。(良康記)

以上のような次第で、先生の①の歌はこの吟行會に提出された十首(同行七名の他三名は現地で参加)の中のものである。

①の歌、羊齒の葉のわずかな湿りに朝の氣配を掬い取つて、悠揚迫らぬ詠い振りである。細かなところまでよく心が行き届いている。ここまで氣持を集中させるのは、並大抵のことではあるまい。吟行會という心を弾ませる緊張感もあつてのことだろう。

②の歌、さらに同會で詠まれた一首で、りんだうに花は認められても、こちらも羊齒の下蔭はまだ「露深し」である。共に「露」が隠し味以上の働きのしている。

③の歌、散策の途次に、切り岸の上から今にも落下しそうな大岩に氣付かれたもの。一瞬、肝を冷やししもしたが、吟行だからともかまなく目に飛び込んでくる景物はみな書き留めよ

うという氣持だろう。読者もきりぎしとはいへ氣楽に読み流すことができよう。

④の歌、これも吟行ならではの作品、デッサンと言つてしまえばそれまでだが、ともかく先生にとつては員数のうちか。

⑤の歌、二、三句に工夫がある。せせらぎは落葉の下になつて見えない、だから音だけが聞こえる。この場合、「この明るさに」がどれほどの働きのしているか。大発見のようでもあり唐突とも言え、賛否が分かれよう。

⑥の歌、一連の詠い納め。それにしても一首目の「朝霧」から六首目の「夕もや」まで一日がかりの吟行會だった。忙しい今日では考えられないことだ。

ついでに本号には「日光」よりの転載歌があるの、引いておこう。

良夜

よちよちと立ち歩む子が白の帽月の光を  
ゆりこぼしつ

わが宿の木の廣葉にさす光月夜よろしく  
なりて來らしも

硝子戸に月の光もすみにけりひろくかび  
ろく庭石は見ゆ

石の上に月の光はかびろくてかまつかの濃きかげぞうつれる

雑くさの花おもしろき夕月夜電柱のかげ  
かたむけるなり

木犀の花

村野 次郎

水底の落葉の下にうろくづのはつかに紅く生きのこりたる

時雨のれば障子をさしてこまれるに匂ひ  
身にしむ木犀の花

寒しぐれ降る日となれり眼につきて日日  
にうつらう庭草のいろ

障子にうつる干柿のかげうそさむし秋の  
日あしのつづまりにつつ

木がらしの街はふけたり銭湯にからつた  
を叩く音のひびかふ

注・村野先生の五首目の第四句は「からだを叩く」だが、原作のまま引いた。明らかに誤植であることは香蘭人なら誰も承知している。

この歌は後に歌集『夕あかり』に収録されたものだが、『次郎三百首』(平6)の「大正十五年」にも見えている。

ことほどさように初期の香蘭には誤植が多かった。このエッセイでは旧字体も含めて、出来る限り原作に忠実に再現している。